

『図書館の自由宣言』成立と蒲池正夫の動向

昭和45年文学部史学科卒業・徳島県立図書館

新 孝 一

図書館界においては「図書館の自由に関する宣言」が時々話題になる。周知のように「自由宣言」は1954年に成立しているが、その制定過程に紆余曲折があったことから成立後しばらくの間、無関心・無風状態の時期が続いた。図書館界においては自由宣言に触れてはいけないという、自己規制があったのではとの意見すらある。

私の個人的体験であるが、1970年に徳島県立図書館に赴任したころ勤務先ではもちろん、全国の図書館関係の会議や研究会に出席しても、自由宣言が話題になることはなかった。ところが就職して3年目の1973年秋にある図書館の研究会に出席したとき、緊急報告として山口県立図書館図書封印事件が取り上げられた。いかにも唐突であったし、どろどろとした内部告発的な雰囲気もあり、私には後味の悪い印象しかなかった。しかし、この山口県立図書館図書封印事件をきっかけに、日本図書館協会では図書館の自由宣言を再確認するとともに、「図書館の自由に関する調査委員会」を設置し、現在まで活発な調査・研究が続けられている。

最近、図書館の自由宣言成立の経緯を調べていくうちに、当時の徳島県立図書館長蒲池正夫の言動がかなり影響していることを知った。（詳細については別に拙稿がある）。蒲池は1949年に徳島新聞社論説委員から請われて徳島県立図書館長に就任。独特の理論と卓越した行動力があり、図書館界に定評があった。1962年には郷里の熊本県立図書館長に招聘され、図書館を核とした文化活動を推進するなど優れた館長として知られている。1967年に定年退職した後、熊本県教育委員長としても活躍している。

図書館の自由宣言成立の背景には、第二次世界大戦後の国際情勢なかでも朝鮮戦争の勃発や講和条約批准をめぐる動き、また破壊活動防止法の制定など国内の政治動向等も密接に絡んでいる。直接的にはマッカーシー旋風に対するアメリカ図書館協会の抵抗があり、さらに戦前の思想善導に対する図書館界としての反省もあって、危機感を募らせた図書館人の魂の叫びが自由宣言成立につながったのではないかと私は理解している。

破防法制定をめぐって世相が混沌としたなか日本図書館協会編集部は、1952年8月の『図書館雑誌』上で「図書館の中立について」の討論を呼びかけた。図書館界から直ちに反応があり、編集部は5回の特集を組み、計21名の意見を掲載している。いわゆる「図書館の中立性論争」とよばれるものである。その後、「図書館の中立性論争」から「図書館憲章制定」へと議論は進み、やがて「図書館の自由に関する宣言制定」へとつながっていく。

蒲池は徳島県立図書館長のかたわら1951年に日本図書館協会理事（四国ブロック選出）に就任している。日本図書館協会編集部が中立性論議を呼びかけたとき、蒲池はとくに意見はのべていない。その後、徳島県立図書館の機関誌『徳島文化』や『図書館雑誌』に寄稿して猛烈に持論を展開していく。蒲池は、図書館の中立性を論議するよりも館界の組織強化が先決ではないかとして、一時の抽象

的な感情論ではなく、図書館が中立を守るためには具体的な理論と確固たる信念が必要であると論じて、憲章や宣言をすることへの慎重論を唱えている。

当時の『図書館雑誌』には蒲池と同様の意見も若干見られるが、大多数は憲章制定支持の方向であった。そして1954年の全国図書館大会および日本図書館協会の総会において、「図書館の自由に関する宣言」制定が提出された。ここでも再び蒲池は反対論を熱っぽく主張している。結局、2日間にわたる長時間の激論が繰り広げられたが、最終的に採決の結果、自由宣言の本文のみが賛成多数で可決され、その他の付帯事項は役員に一任して閉幕している。

宣言成立後の日本図書館協会の理事会は、四国・九州の役員が欠席したり、さらに土岐善麿理事長の辞意表明などもあって混迷する。その後松山市で蒲池ら有志の館長が集い関係修復を図っている。この時期、蒲池は理事ではなかったが、松山市の会合のあと開催された日本図書館協会理事会にも出席して積極的に発言している。しかし、蒲池をはじめ役員一同何故か「図書館の自由宣言」の取り扱いには一切触れていない。

松山市で何が話し合われたか具体的記録はないが、おそらく自由宣言が話題になったであろうことは十分に想像がつく。蒲池はその後ますます図書館界で発言力をまましていくが、そのことと自由宣言成立後の無風状態と関連があるのか定かではない。いずれにしても蒲池が図書館界を離れてから数年後に、山口県立図書館図書封印事件が起こり、再び自由宣言が脚光を浴びることになる。1973年以降は「図書館の自由宣言」が図書館界を賑わしていくが、このことを蒲池はどのような想いで受け止めたのであろうか。

私は縁あって蒲池が心血注いだ徳島県立図書館に勤務している。光陰矢のごとしというが早いもので今年で32年になった。あまりにも偉大であった蒲池正夫の足跡を今、静かに偲んでいる。

(しん・こういち)